

Windows の更改が進まない訳は？

酒井 寿紀（Sakai Toshinori） 酒井 IT ビジネス研究所

Windows XP のサポートが終了

2014 年 4 月にマイクロソフトの Windows XP のサポート期間が終了した。XP は 2001 年にリリースされたパソコン用の OS である。その後、Windows Vista、Windows 7、Windows 8 と引き継がれてきたので、XP は現在の Windows 8（8.1 を含む）の 3 世代前の OS で、リリース後 12 年以上経っている。

最近の Windows のサポート期間は、通常リリース後 10 年間なので、XP のサポート期間はこれらに比べても長い。そのためマイクロソフトは、OS 更改のメリットを強調して、新 OS への切り替えを盛んに薦めている。

その対応状況について、「日経コンピュータ」2014 年 7 月 24 日号が、ノークリサーチの調査結果を紹介している。それによると、年間売上高 5～50 億円の中堅中小企業の 2014 年 4 月時点での状況は、「XP の利用を今後もしばらくは継続する」が 13%もあったという。その理由は、「利用中の業務システムが XP 以外の OS では動かない」が 31%で、「PC や OS の刷新に必要な費用が捻出できない」が 24%だったという。

マイクロソフトは、新 OS への移行は容易で、メリットが多いと強調しているが、現実には移行への抵抗が根強いようだ。小生の OS 更改の経験からその理由を考えてみよう。

OS のバージョンアップに便乗して拡販？

ひとつの問題は、自社開発のソフトに

限らず、市販のソフトや機器についても、OS を更改すると使えなくなってしまうものが多いことだ。

例えば、小生が Windows Vista で使っていた 2009 年版の会計ソフトは、64 ビット版の Windows 7 以降では使えない。そのため、小生は Windows 8 に切り替えた現在でも、実用上は支障がないため、2009 年版を Vista のパソコン上で使っている。

また、Windows XP で使っていた宛名印刷ソフトは、Vista では使えず、新バージョンの購入を余儀なくされた。そして、その新バージョンも Windows 8 では使えず、再び有償のアップグレードが必要だった。

周辺機器についても、Vista で使っていたスキャナーには Windows 7 以降のドライバが用意されていないため、これを使うには Vista のパソコンを残しておく必要があった。

将来の OS の変更に対応できるソフトや機器の開発には困難を伴うが、ベンダーは極力、長期間使える製品の開発に努めるべきだ。例えば、OS の 64 ビット化などは 10 年以上前から予想できたはずだ。そして新 OS に対応するための最低限の変更は、機能強化とは分けて無償で提供するべきだ。

現状は、OS のバージョンアップに便乗して新製品を売り込もうとするハード／ソフトのベンダーが多いようだ。

新製品が機能後退？

しかし、カネと手間をかけてソフトや

機器を新製品に切り替えれば、従来と同等なことができるときはまだいい。実際は、新製品では従来できたことができなくなることがしばしばある。

小生はウェブページの作成にマイクロソフトの FrontPage というソフトを使っていたが、このソフトは 2003 年版を最後に廃版になった。その後継ソフトは、新機能を大幅に取り込んだものだが、操作方法が大きく違い、また従来の機能で十分なユーザーには余計な機能が多くて使いにくい。そして、FrontPage は Windows 7 以降では使えなくなった。

また最近のソフトには、従来クライアント側で行っていた処理をサーバー側に移し、クラウド・サービスとして提供するようになったものが多い。アドレス帳やスケジュール表の管理、写真や音楽のファイルの管理、パスワードの記憶機能などだ。

クラウド・サービスには利点もあるが、情報漏洩、データ消失等のリスクがあるため、利用を避けたい人もいる。新ソフトにはクラウド・サービスしかないとき、小生を含め、こういう人は古いソフトを使い続けるしかない。

また、小生が Vista で使っていたプリンタは厚手の封筒にも印刷できたが、同じメーカーの新製品では、これができなくなった。そして、旧製品のプリンタに

は Windows 8 用のドライバがないため、Vista のパソコンも継続使用している。

最低 10 年間は使える製品を！

このように、Windows の更改が進まないのは、Windows を取り巻く製品にも大きな原因があるように思う。

そして、そもそもシステム更改のニーズが減りつつあることが根底にあると思われる。

パソコンも、事実上の世界標準の IBM PC が生まれてから 30 年以上経ち、いまや成熟製品になった。今までのような急激な進歩はもう望めない。そうすると、新製品に真っ先に飛びつくより、安定して使っている現システムを使い続ける方がだんだん得策になってくる。特に、定型業務に使っている企業では、機器が壊れない限り、現在のシステムを「塩漬け」状態で使い続ける方が、カネもかからず、システム更改に伴うリスクも避けられる。

そのため、今後ハード／ソフトのベンダーには、機器の修理費は別にして、10 年以上は追加出費なしに使える製品の提供が求められる。これはベンダーの自主性に期待するしかないことだが、ユーザーやメディアには、ベンダーの姿勢に目を光らせ、適確に情報を開示することが求められる。